I. 論　文

安川　哲夫　　リーパの「文法」の寓意図像について
—教育のイメージ変化に関する研究—

筑波大学大学院人間総合科学研究科教育学専攻『教育学論集』第3集、2007.3

リーパの「文法」の寓意図像について
——教育のイメージ変化に関する研究——

安川　哲夫*

1．課題の設定

抽象的概念を寓意（アレゴリー）で表現したリーパの『図像学』（Cesare Ripa, *Iconologia*, 1st ed., 1593）は、シンボリズムのガイドとしてよく知られている。当初は文字による記述のみであったが、1603年の第三版ではじめて木版画が挿入され、以後、項目を増やしながらイタリア国内で版を重ねていった。そして後にはフランス、オランダ、ドイツ、イギリスの各国語に訳され、その影響は広範囲に及んだ。それがヨーロッパの文化や精神構造を理解するための不可欠な作品とされる所以が、ここにある。図像は時代の状況や心性、イデオロギーを反映している。したがって、時代や国が異なれば、同一の項目でも描かれ方は変化してくるし、同一のデザインでもそこに含意されている意味内容は違ってくる。かかる点に着目して、著者は以前、リーパの「教育」図像を手がかりに近代の教育概念の構造変化を論じたが[1]、「文法」図像に焦点を当てた今回の論文は、その続編に当たるものである。

文法は、7自由学芸を確立した5世紀のカペラ（Martianus Capella）以降、諸学問の基礎、入門と位置づけられたこともあって、教師が生徒を教える場面で図解されるのが一般的であった。最も古い文法図とされる10世紀初頭のカペラ写本の細密画（パリ国立図書館）は、切り妻造りの建物の中で、右手に教授杖をもった教師が生徒集団に語りかけている場面を描き出している。また修辞学や弁証法とともに三学をまとめて描いた1200年頃のカペラ写本（聖ジュヌヴィエーブ図書館）も、教室の要素は欠けているものの、教師と生徒のモチーフを使い、後光を

* 教育学専攻 教授

持つ女性の擬人像が左手に鞭を持ち、右手で彼女の前に座っている生徒の本（銘からドナトゥスの『小文法書』と判別できる）を指さすデザインで文法を描写している。さらに言えば、有名なシャルトル大聖堂（1145-55年）やフライブルグ司教座聖堂（1270年頃）の７自由学芸の彫刻は、教師に良い子と悪い子の二人の少年を伴わせ、後者に教師が体罰を与えている様で文法を表現している。描かれた生徒の数や様態は違うけれども、総じて言えば、初学者を教える際の有効な手段とされた体罰が、文法を表象する際の共通した表現様式であった。そしてこの構図は、中世の７自由学芸が解体していくルネサンス以後も文法教科書の挿絵や学校絵画に継承され[2]、19世紀まで存続していくことになる。こうした図像伝統のなかにあって、1644年のフランス語版ではじめて現れたリーパの文法図（図１）は、女性が水差しで植物に水を注ぐ姿で描かれた点で、構図に際立った特徴を示しており、図像史上においても特異な位置を占めている。

10世紀から18世紀までの文法図を類型化し、個々の形式の意味を問うたエアーズ･バグリーは、それを「庭師としての文法」としてカテゴライズし、体罰モチーフの不適切性を認めるものとして位置づけた[3]。かかる評価は、「教師としての文法」にもっぱら焦点を合わせ、「厳しい文法」と「優しい文法」という二つの概念を使って分析した彼の研究の必然的な結果であったと言わなければならないが、体罰との関連からのみリーパの図像を把握するのは、いささか短絡的であるように思われる。というのも、リーパの『図像学』には伝統的な文法の構図をそっくりそのまま採用した「教育」の図像があり、それとの関連性を無視しては「文法」図像の固有の特質は解明され得ないからである。加えて、その図像史上の特異さを明らかにするためには、文法図の伝統と変容、および同時代の寓意図やそこに表現された世界観との関連を考慮する必要があろう。本論文の課題の第一は、リーパの「文法」が上述の一連の図像とどのような関係にあり、いかなる位置を占めていたかを明らかにすることにある。

上述の課題と結びついて、リーパの文法図の思想上の系譜を明らかにするという第二の課題が生まれてくる。この点に関しては、初出は1938年と古いけれども、ルドルフ・ウィトカウアーの論文――「グラマティカ：マルティアヌス・カペラからホガースまで」――が一つの仮説を提示してくれている[4]。木に水を注ぐ

寓意で描かれた1761年のウィリアム・ホガースの版画を扱ったその論文で、彼はこう主張する。木に水をやる寓意で文法を表現することは、植物の成長と水をやることを若者の教育にたとえた古代ローマのプルタルコスにすでに存在しており、中世の一連のキリスト教作家たちの思想とも密接に結びついていた。そしてそれは、スコラ学の発達の中で一時途絶えたものの、ルネサンス期に再び復活し、リーパの文法図に具現化されていった。ホガースの版画は古代から着想を得ており、そのデザインはリーパの文法図の系譜に属している。ホガースは1760年のドイツ語版『図像学』を見ていたはずだ、と。

ウィトカウアーによれば、要するに、木や植物に水をやる寓意で文法を表現することは、一時的な中断はあったものの、古代から18世紀後半に至るまで一貫してあったことになる。ところが、実際問題としては、木や植物に水をやる姿で描かれた文法のイラストは、古代や中世はもちろんのこと、16世紀に入るまでほとんど存在しない[5)]。また、後に明らかにするように、17世紀のリーパの文法図の思想とその基本モチーフは、プルタルコスの教育論から大きな影響を受けたルネサンス期のエラスムスのそれとは異質のものであった。本論文の第二の目的は、木や植物の成長というメタファーを使った教育論の系譜の解明から、リーパの文法図の淵源を解明することにある。

サブタイトルにも示されているように、本論文は、図像分析を中心に教育のイメージ変化を探り、よって近代の教育思想を再検討することを基本テーマとしている。この点でのリーパの文法図の史料上の意義はきわめて高いと言わざるを得ない。なぜならそれは、教育史家たちには馴染みの二つの出来事を想起させてくれるからである。一つは、『オックスフォード英語辞典』（OED）が「教育」の初出例として挙げたサー・トーマス・エリオットの事例からも見られるように、近代語「教育」が「育て上げる」（bringing up）という意味内容を有して1530年前後に誕生したという事実。もう一つは、ルソーが『エミール』（1762年）の冒頭部分で述べていた次なる一文である。「若い植物が枯れないように、それを育て、水をそそぎなさい。……あなたの子どもの魂のまわりに、はやく垣根をめぐらしなさい。……植物は栽培によって作られ、人間は教育によって作られます」[6)]。第一の事実からは、リーパの文法図はルネサンス期に生まれた近代の教育観念を図解し

たものではなかったか、という問いが、また第二の事実からは、リーパの文法図はルソーの教育観を先取りしたものではなかったか、という問いが発せられよう。これらの問いは、近代教育の理解にとって決して無意味なものではない。というのも、近代の教育概念が「養育」の観念を含んで成立していたことに着目する研究者たちは、近代教育の歴史を学校が私的営みである「教育」を浸食していく過程として把握して、その抑圧的性格を強調し[7]、他方、『エミール』の革新性をその「農耕モデル」の教育観、「植物モデル」の子ども観に見いだす研究者は、それを根拠に、ルソーは伝統的な教育観や子ども観に対して「決定的な批判」を行い、教育の歴史に「まったく新しい時代」を招いた、と強調するからである[8]。本論文の第三の課題は、わが国で喧伝されているこうした見解を批判的に検討することにある。

以上、三つの課題を設定したが、以下では次のような順序で考察は進められていく。前半部分では、まず最初に、リーパの各版の「文法」テクストとイラストとの関係が問われていく。言葉とイメージが完全に対応し、各版のテクストが共通していれば、この問題はさして大きな問題にはならないであろうが、イタリア語の各版は終始一貫してイラストを掲載しておらず、それをはじめて載せた1644年のフランス語版もテクストの半分しか視覚化していないため、この作業は本研究では不可欠なものとして位置づいてくる。次に、テクスト分析から明らかにされた言葉とイメージのねじれ現象の意味を問うなかから、植物に水をやる寓意がリーパの文法イラストとして採用された原因を、文法図像の伝統と16・17世紀に大流行したエンブレム・ブックに探り、バロック期の教育的宇宙像がいかなるものであったかを明らかにする。後半部分では、植物に水をやる寓意を生み出す母胎となった教育思想の系譜を、プルタルコス、エラスムス、エリオットらの教育論に探り、そこに体現された教育観の違いを類型化しながらリーパの「教育」と「文法」の図像の源泉を明らかにする。そうして最後に、これらの図像の出現と時を同じくして著されたコメニウスの『大教授学』の教育メタファーが、同じ系譜に属しながらも第三の新しい類型を提示していたことを指摘して、17世紀の教育思想の一端を明らかにしたいと考えている。

2．言葉とイメージ

先にも指摘したように、イタリア語版の項目「文法」(Grammatica) にはイラストは付いていない。言葉による説明だけである。もっと興味深いことには、そこには項目が二つあって、異なる内容が記されている[9]。最初の項目を「A」、後者を「B」として紹介すると、「A」は、女性がラテン語の銘――「言葉は綴り、語形、そして発音において正しく」(Vox litterata et articulata debito modo pronuntiata)――の入った帯と鞭をもち、彼女の乳房から乳がほとばしり出ている様を記述している。そして、帯の銘は文法の本質と機能を定義し、鞭は子どもたちを規律づけるための懲罰の道具であること、また「乳房から出ている乳は、学 scienza の甘美さが文法の胸や内臓から出ることを意味している」と説明する。テクスト「B」は、女性が右手にやすりをもち、左手にもった水差しで若い植物に水を注いでいる様を記述している。そして、文法が7自由学芸の筆頭にあり、「口を開けて正しく話す規則」であることを述べた後、各々のアトリビュートについてこう説明する。「やすりは、文法が知力を呼び覚まし研磨することを示している。水の入った水差しは、文法が若者であるところのまだ柔らかい植物を世界に向けて成長させることを告げている。なぜなら、水が植物そのものを成長させるように、文法はしかるべき時に学問 dottrina の成果をもたらすからである」と。

繰り返すと、「A」がラテン語の銘と鞭、乳房から乳がほとばしり出ている様子で、そして「B」がやすりと植物に水を注ぐ様子で説明している点に、両者の違いがある。さらに言えば、「A」が子どもの規律に力点を置いて、文法を学ぶことから生じる「学の甘美さ」を謳い上げ、「B」が知力の錬磨に力点を置いて、「学問の成果」を文法の効用として説いている点も、両者の違いとして指摘することができよう。

イラストをはじめて掲載した1644年のフランス語版の翻訳・編纂者ボードワン (Jean Baudoin, 1590？－1650) は、二つあった項目を一つにまとめて記述しているが、内容的には二つの文法を語っている[10]。便宜上、テクストを前半部と後半部とに分けて紹介すると、前半部は「文法の二つの主要な目的はこの女性の絵によって明示される」という一文から始まり、巻物と植物に水を注ぐ様で文法を代表させている。他方、「文法はまた若い女性の姿でも描かれる」という一文から始

まる後半部は、やすりと鞭をもち、乳房から乳がほとばしり出ている女性で文法を規定している。図1と照合させるならば、イラストが実はテクストの前半のみを図解したものにすぎないことが判ってくる。なぜ、前半部の規定のみを採用し、後半部の規定を考慮しなかったのか。その理由は後に見るとして、もう少しフランス語版の説明を聞いておこう。イタリア語版にはない、あるいは、それと異なる解釈が導入されているからである。

まず、植物に水を注ぐ寓意について、テクストは、これは「柔らかな植物と同様、若い精神も培われることにより、共通の公益のために、優れた学問の成果を産み出すことを示している」と述べ、「共通の公益」という新たな観点を提示している。後半部に記されている「若い女性」という規定は、後にも先にも1644年版にしか見られない独自のものである。テクストは、女性の若さは「成長のシンボル」であると言う。この特徴は、ボードワンの文法に倣って描かれたであろう1644年のフランスの銅版画[11]や1650年のローラン・ド・ラ・イール（Laurent de La Hyre, 1606-56）の絵画（図2）[12]では、いかんなく発揮されている。新たに鞭と結びつけられたやすりについても、多少違ったニュアンスが持ち込まれている。「精神の中にある粗野で余分なものを取り除く」という役割が付与され、やすりは「勤勉の印」とされている。この機能は、リーパの「学園」（Academia）の擬人像が手にしていたやすり――それに添えられた標語は、「（それが）取り除き、かつ磨き上げる」（detrahit atque polit）と謳っている――と同じ内容のものであるので、高次の学問へと子どもを準備する文法の性格を言い表したものと言えるだろう。

1644年版の上述の諸特徴は、カペラが『フィロロギアとメルクリウスの結婚』（De nuptiis Philologiae et Mercurii, 410-427）の中で描いていた文法の擬人像と比較すれば[13]、さらにはっきりとしてくるだろう。乙女フィロロギアに贈られる7人の花嫁付添人（＝7自由学芸）の一人として描かれ、哲学によって最初に紹介される文法は、「老婦人」であって「若い女性」ではなかった。彼女はまた、舌や歯に様々な手術を行って話し方の誤りや悪い癖を矯正する、医者と類似の仕事に従事する学問であることから、一方の手に外科用メスや薬などが入った象牙の小箱（ないし壺）をもち、他方の手にやすりをもった姿で現れていた。自由学芸

の図像を歴史上はじめて登場させたレミギウス（Remigius of Auxerre, c. 841-c. 904）の『結婚』注釈書の文法図（900年頃）はカペラの叙述に従ったものではなかったけれども、マンテーニャ（Andreas Mantegna, 1431-1506）作とされる1465年頃のタロッキ（図３）では、文法は古代ローマ風のローブで頭から全身を覆った医者によく似た姿で描かれている[14]。

やすりを文法のアトリビュートとするリーパの規定はカペラの叙述にならったものであったが、そうであれば、文法イラストでもやすりは欠かすことのできない必須物であったはずである。しかし1644年のボードワンはそれを排除した。不自然であることは明らかであった。18世紀の翻訳者や編纂者たちも同じように考えたに違いない。実際、1760年のドイツ語版の編者ヘルテル（図４）[15]、1766年のフランス語版のブダール[16]、1779年の英語版のリチャードソン（図５）[17]らは、一様にイラストにやすりを描き加えている[18]。18世紀版リーパの文法図の特徴の一つがここにある。18世紀版はまた、テクストとイラストをできるだけ一致させようと試みている。イラストが先行していたため、結果として生じてきたのは、テクストの簡略化であった[19]。

以上、言葉とイメージの関係に注目して、「文法」のテクストとイラストとの対応関係について見てきた。イタリア語版は、内容の異なる項目を二つ設けたことも手伝ってか、テクストに対応した統一イラストを描き出せないままに終わっていた。1644年のフランス語版は、イタリア語版の内容をほぼ踏襲していたけれども、図の読み方をリードする一文を付け加えたり、アトリビュートの組み合わせを変えるなどして、文法イラストを作り出すことに成功した。しかしながら、植物に水を注ぐ女性と乳房から乳がほとばしり出ている女性という、二通りの擬人像の記述はそのままであったため、テクストとイラストとのねじれ現象は依然残ったままであった。二人の擬人像の並置は、中世以来の伝統をもつ文法イメージと、16世紀から17世紀前半に新たに台頭してきた文法イメージとの共存を表していた。そこで次節では、文法イメージの図像学的・歴史的分析を通して、まず、乳房のメタファーを使って文法を表すことの方が当時一般的であったことを明らかにし、その上で、文法イラストの作成に当たって1644年版がなぜ植物に水を注ぐ寓意を優先させたのか、という問題を探っていきたいと思う。

図1

図2

図3

図4

図5

図1　1644年のフランス語版のリーパ『図像学』の「文法」、パリ
図2　ラ・イールの絵画「文法」、1650年、ロンドン・ナショナル・ギャラリー
図3　マンテーニャのタロッキ「文法」、1465年頃
図4　1760年のドイツ語版のリーパ『図像学』の「文法」(部分)、アウスブルグ
図5　1779年の英語版のリーパ『図像学』の「文法」、ロンドン

3．なぜ「水やりの文法」が優先されたのか？

1644年以前の作例で、植物に水をやる文法図は、目下のところ、ウィトカウアーが挙げているマルカントーニオ・ライモンディ（Marcantonio Raimondi, c. 1480-1534）の版画[20]の一例しか確認できていない。これに対し、乳房から乳があふれ出す姿で文法を寓意したものは、1593年のボワサール（Jean Jacques Boissard, 1528-1602）の『エンブレム集』第9番（図6）[21]や、オックスフォードのマートン・カレッジの1635年の7自由学芸図（図7）[22]などに見いだすことができる。後者の作例が多いのは、「乳房」のメタファーを使って文法を寓意することが中世以来の伝統の一つであったことによると思われる。豊かな乳房から流れ出す乳のように文法は学の楽しさを子どもに味あわせるとか、鞭の苦痛も最終的には喜びに変わるとする、イタリア語版のテクスト「A」および1644年版の後半部の規定は、この図像伝統を踏まえたものであったと見て良いであろう。

「授乳の聖母」や「慈愛」の寓意からとられてきたであろう「授乳の文法」図は、14世紀のイタリアで最初に現れた。ピサ大聖堂の説教壇の支柱土台に刻まれたジョヴァンニ・ピサーノ（Giovanni Pisano, c. 1250-1314）の彫刻（1302-10）は、この最も初期の作品であった。それは、二人の子どもに授乳する母親の姿で文法をシンボライズするという、まったく新しい表現様式を示していた。なぜそうした寓意が14世紀イタリアに突然出現したのかに関しては、エヴァンスがすでに一つの答え――アウグスティヌスへの関心の再生と遅れて受容されたスコラ学の発達――を出しているので詳細な説明は省略するが[23]、留意しておきたいのは、アウグスティヌスの勝利を描いた図像では一般に、文法は一方の手に鞭をもち、他方の手で子どもに乳を与える姿で表現されていたという点である（図8を参照）[24]。シエナの文芸アカデミー（1525年頃創立）の一員で、そのサークルから多くの情報を入手していたリーパには、かかる文法図が挿入された写本を見る機会が十分あったと思われる。イタリア語版の「A」テクストの鞭と乳房との組み合わせは、そこからヒントを得て導かれてきたのではなかったろうか。

文法を鞭と授乳で表現することについては、13世紀から15世紀にかけて古典の一つに数えられたアラヌス（Alanus ab Insulis c. 1116-c. 1202）――フランス語名アラン・ド・リール（Alain de Lille）――の『アンティクラウディアヌス』（1181-

図6

図7

図8

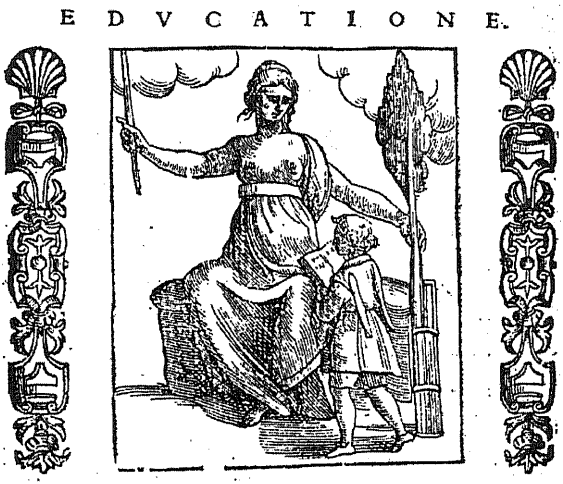


図9

図6　ボワサール『エンブレム集』、1593年、第9番のエンブレム
図7　オックスフォード・マートン・カレッジの「7自由学芸」の「文法」(部分)、1635年
図8　1355年の写本細密画「徳と学芸」(ニッコロ・ディ・ボローニャ筆)の「文法」(部分)、ミラノ
図9　1625年のリーパ『新版　図像学』の「教育」、パドヴァ

84）の影響が一般に指摘されている[25]。アラヌスは乳房に独特の機能を付与し、文法をこう記述する。「彼女の乳房はみなぎる乳の流れに浸」る。「乳を与える母の胸を求める間、その食べ物は幼児を育て、まだ固いものを食べられない幼児は液体で養われる」。彼女は一方の手に鞭をもつが、これは少年が欲しいままに過度に食べたり飲んだりするのを罰するためである。乳は鞭打ちを和らげる。「同一の行動で、父ともなれば母ともなる。鞭で父の代わりを務め、乳で母の役を果たす」と[26]。乳房には、幼児の成長を促すことと鞭の厳しさを和らげるという、二重の役割が与えられているのだ。乳房に関するこうした理解が、ボードワンが、カペラでは「老婦人」とされていた文法の擬人像を「若い女性」に修正し、そこに「成長のシンボル」を読み取ることになった要因の一つではなかったかと考えられる。

先述のボワサールのエンブレムやマートン・カレッジの7自由学芸図は、文法を乳房で寓意する様式が16・17世紀にあっても依然支配的であったことを示唆している。そうであればなおさらのこと、かかる芸術伝統に抗してボードワンが植物に水をやるという新しい表現様式を優先させたのは一体なぜなのか、ということが改めて問われなければならないことになる。

第一の理由は、これまで存在しなかった「教育」の項目と図像が、パドヴァで出版された1625年の新版『図像学』にはじめて挿入されたことから説明できる。ボードワンがフランス語訳に当たって底本としたのがこの新版であったことは、そこに「教育」が取り込まれていた事実からも容易に見て取れる。注目すべきは、そこに記されていた内容である。テクストは、体罰を鞭で象徴させた後、「教育の最も主要な部分」である徳の教育を、女性の「乳房と露わな胸」で寓意しているのだ。イラストも、鞭と乳房を強調するかのように、右手にもった鞭を高く掲げ、胸をさらけ出して正面を向いて坐っている擬人像を描き出していた（図9）。1644年のフランス語版でボードワンはこのテクストとイラストをそのまま踏襲した。1625年のイタリア語版はABC順で編集されたものであったが、翻訳者が通常行うようにボードワンも最初から順に訳していったとするならば、“Grammatica”で記されている内容および思想は、先に“Educatione”で訳出した項ですでに十分に表現されている、したがって「文法」の項目でわざわざ「教育」と類似の図像表

現をとる必要はない、と彼が考えたと想定しても、何の不思議もないであろう。むしろ、こうした判断が強く働いていたからこそ、ボードワンは、「文法の二つの主要な目的はこの女性の絵によって明示される」という一節をあえてテクストの冒頭に挿入し、前半部の規定のみで文法を図解した、と考える方が自然であるように思われる。1644年のフランス語版にはじめて登場した「文法」の図像は、「教育」の項目と図像の出現と密接不可分の関係にあるのだ。

植物に水をやる寓意図を優先させたもう一つの理由は、それが時代の精神を体現している、ないしは、新しい教育の思想をより良く表現している、と判断されたからであったに違いない。良く知られているように、16世紀から17世紀を通してヨーロッパではエンブレム・ブックと称される寓意図像集が数多く出版された。1531年のアンドレア・アルチャーティ（Andrea Alciati, 1492-1550）の『エンブレム集』に代表されるこれらの作品群は、教訓を視覚的に提示して、読者を徳へと導くことを主眼としていた。このため、エンブレム作家や編纂者たちは、古代ギリシア・ローマの神話や故事、およびヒエログリフに題材を探し求める傍ら、他方では新しいデザインを考案することに躍起になっていた。植物に水をやる寓意表現は、こうした思想的・文化的コンテクストの中で生まれてきた新しい考案物であった。

それが最初に登場したのは、1551年にリヨンで出版されたクロード・パラダン（Claude Paradin, c. 1510-73）の『英雄的インプレーサ集』においてであった。この書は新しいタイプの図像集で、16世紀中後期に出版されたフランスのエンブレム・ブックの中では最も影響力の大きかった書の一つであった[27)]。そこには182枚の図版が含まれていたが、その中の一つに「少しずつ」（Poco à poco）というモットーを伴ったインプレーサがある（図10）。一見すると、水差しが植物に水を注いでいるだけの、何の変哲もないイラストのように見えるかもしれないけれども、図の下には、「草は地面に生え繁茂すれども、誰もその成長には気づかない。同様に、正直や徳も、実例や実践を通してしか気づかれない」という説明が添えられており（訳は1591年版の英訳による）、このエンブレムが、徳を育み、徳を実践することの重要性を謳ったものであることが分かってくる。

寓意に道徳的教訓を盛り込んでいく傾向は、宗教改革と対抗宗教改革の軋轢が

激しさを増していった16世紀末、いっそう強められていく。たとえば、ヨアヒム・カメラリウス（Joacim Camerarius, 1534-98）が1590年に出版した『象徴とエンブレム集』の第2番には、カドケウスをもったメルクリウスが水差しで月桂樹に水を注いでいるエンブレムが収められている（図11）[28]。モットーは、「なにゆえに木には必ず水が注がれなければならないのか」（Nempe arbos unde rigetur）であり、エピグラムは、「われわれの庭に水を注ぎ込む人は多くのものを加え、そして神の働きによってわれわれの精神は高められる」と語っている。メルクリウス（ギリシアのヘルメス）は古代ローマの学問と芸術の神である。ルネサンス期にメルクリウスのカドケウスとアポロの竪琴が学芸の寓意の新しい形式の編成に寄与したことはよく知られているが[29]、メルクリウスがここに水差しをもつ存在として登場してきたことは、人間の精神を本当に開発し向上させてくれるものは一体何であるのか、それは「神の働き」による以外にないではないか、という認識が高まってきたことを物語っている。そこにキリスト教思想がどれだけ影を落としていたかは判然としないが、流行の考えと結びつけて宗教的感情を鼓舞しようというのは当時の時代の精神であったし、また何よりも、異教の寓話とキリスト教の教えとを融和させる必要性が喫緊の歴史課題として生じていたことも、確かな事実であった。

そうした状況が、16世紀後半から17世紀にかけて新しいエンブレム・ブックが次々と生み出されていく思想風土を形成していた。新たな寓意の作成に大きな役割を果たしていたのがイエズス会士たちであったことは、この分野の研究者たちの一致した見解となっている。ジャン・セズネックによれば、彼らは異教的伝統をキリスト教的に変容して、ルネサンスが集めた神話の知識を集大成し、象徴の歴史に変えた。そしてそれを異教の毒に対する解毒剤として積極的に勧めた[30]。教育の世界においても同様の傾向が見られた。イエズス会の学校では、エンブレムが学校カリキュラムに登場し、教育の一部を成していたのである[31]。

これらの動向形成に大きなインパクトを与えたのは、ラテン語名オットー・ウェニウス（Otto Vaenius, 1556-1629）――本名オットー・ファン・フェーン（Otto van Veen）――の作品群であった。ライデンに生まれ、リエージュの宮廷で人文主義者、画家としての教育を受けたウェニウスは、若きルーベンスの師としても

知られているが、彼の名声が高まったのは、むしろエンブレム作家としてであった。1607年の『ホラティウスのエンブレム集』で一躍脚光を浴びた彼は、翌1608年、世俗の愛をテーマとした『愛のエンブレム集』を出版する。前作に劣らず大変な人気を博したこの作品で、ウェニウスは二人のキューピッドを主人公として登場させる。そして続く1615年の『聖なる愛のエンブレム集』では、彼らを「聖なる愛」(Amor Divinus) と「魂」(Anima) の寓意像として使用し、人間の「魂」が「聖なる愛」を希求していくストーリーを作っていく。エンブレム研究の大家マリオ・プラーツによれば[32]、ここに人間愛のエンブレムから神の愛のエンブレムへの一大転換が起こり、次世代の『敬虔な欲望』(Pia Desideria, 1624) や『世界像』(Typus Mundi, 1627) に引き継がれていくことになる。ちなみに、両作品とも当時大好評を博したエンブレム・ブックで、イエズス会の学校とはとくに緊密な関係をもっていた[33]。

今、1608年の『愛のエンブレム集』に注目すると、その第40番に「水を注がれた植物はいっそう成長する」(Plantae rigatae magis crescunt) というモットーをもったエンブレムが確認できる(図12)[34]。ウェニウスは1618年の『エンブレム集』第25番でも同形のエンブレムを使用しているが[35]、そこで庭の植物にじょうろで水を注いでいるのは弓矢をもったキューピッド、つまり、聖なる愛アモルである。プラーツはパラダンの水差しのインプレーサがウェニウスに示唆を与えたと指摘している[36]。それに依拠して言えば、われわれは、パラダンからカメラリウスを経てウェニウスに至る一連のエンブレムに通底していたモチーフは、精神の開発と徳の涵養であった、と主張できるだろう。さらに一歩踏み込んで、こうも言えるだろう。人間の成長を促して精神から粗野を取り除き、彼を道徳化していくのは神の愛の力であり、したがって愛が徳の源泉であり、かつ良き教師である、という考えが次第に強まってきた、と。水差しをもつ存在がメルクリウスからアモルに変化し、また『聖なる愛のエンブレム集』の第8番(図13)[37]——「愛が教える」(Amor docet) ——が、教師「アモル」が生徒の「魂」に講義している構図を採っていたことからも、上述の主張はある程度根拠づけられるように思われる。

以上のように見てくるならば、リーパの文法の寓意図は、対抗宗教改革の流れ

図10

図11

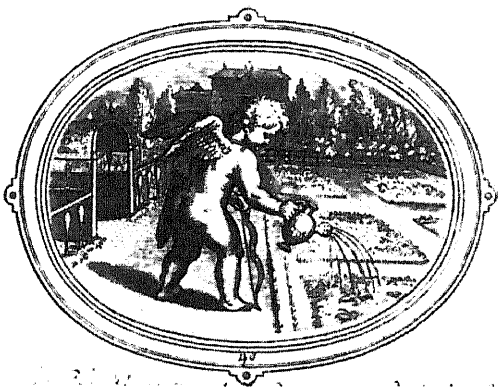


図12

図13

図10　パラダン『英雄的インプレーサ集』、1551年、「少しずつ」のエンブレム
図11　カメラリウス『象徴とエンブレム集』、1590年、第２番のエンブレ
図12　ウェニウス『愛のエンブレム集』、1608年、第40番のエンブレム
図13　ウェニウス『聖なる愛のエンブレム集』、1615年、第８番のエンブレム

の中で発達してきた、キリスト教の愛を強調する新しい思想から大きなインスピレーションを受け、またオットー・ウェニウスに代表される一連のエンブレム・ブックから図案の着想を得ていた、と結論づけられよう。そのことを直接裏付けるものは「文法」には見いだされない。しかしながら、それと密接な関係にある「教育」のテクストには確たる証拠が記されている。1625年のイタリア語版や1644年のフランス語版はいずれも、聖パウロの『コリント人への第一の手紙』の一節――「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神である」(第3章第6節)――を引用し、これを典拠として教育には神の恩寵が必要なことを強調し、これを「光」で象徴させていた。なお、イタリア語版の「教育」図像は、光を雲が二つに分かれる様子で表現している(図9を参照)。

リーパの文法の図像上の源泉について一定の理解が得られたと思われるので、次に植物に水をやる寓意の思想上の問題に移りたいと思うが、あらかじめ断っておけば、これは、人間の一生を樹木の成長になぞらえる比喩を追いかけるものではない。そうした類の比喩ならばホメロスにも見いだされるし、現代でも日常的に語られている。問題は、樹木や植物にいかに働きかけ、どのような方法で成長を促すのか、ということにある。教育のイメージ形成のポイントは、この一点にかかっている。

4. 庭師としての文法－その思想と系譜－

植物の成長と水をやることを若者の教育にたとえることは古代以来一貫したヨーロッパの伝統であった、というウィトカウアーの見解にはどの程度信憑性があるのだろうか。この検討作業を進めるに当たってプルタルコス(Plutarchos, 46-120)の教育論をスタート点に置くことには、誰しも異論がないであろう。

「子どもの教育について」と題された作品(110年頃筆)が、プルタルコス自身の手によるものでないことは、数世紀前から常識化している。しかし、1471年頃にグアリーノ・ダ・ベローナ(Guarino da Verona, 1370-1460)によってラテン語に翻訳された当時は、その書――ラテン語のタイトルはDe Liberis Educandis――はプルタルコス筆のものとして流通し、同時代の教育家たちに多大な影響を及ぼしてきた(この点を考慮して、ここではプルタルコスの書として扱うことにする)。と

りわけ彼が農業とのアナロジーを使って教育の基本三要素を規定し、それらの一致の必要性を説いた下りは、中世の「神の研究」に代わって「フマニタス研究」を提唱していたルネサンス・ヒューマニストたちにとっては、まさにわが意を得たりの感があったであろう。その箇所を河野與一訳によるギリシア語からの翻訳で紹介すると、こうなる。

「一般に、技術や学問についてはよく言われることだが、徳性においてもちゃんとやっていけるようになるには三つのものが揃わなくてはならない。天分（フュシス）と理性（ロゴス）と習慣（エトス）がそれだ。理性とは学習のことで、習慣とは修行のことだ。……農事にはまず良い土地、次に心得ある農夫、次には申し分のない種子が必要だが、天分は土地に、先生は農夫に、教えと戒めは種子に当る。この三つが揃って一つの息が通ってはじめてピュタゴラスやソクラテスやプラトンのような人になれる。」[38]

この農業のたとえを、プルタルコスは、子どもが幼いうちはパイダゴーゴスや教師に預けてほったらかしにし、後になって慌てて息子に勉強を山ほど課す、当時の父親たちの教育慣行を批判する際にも使用していたが[39]、これらはそっくりそのままエラスムス（Desiderius Erasmus, 1466 - 1536）の教育論（De Pueris Instituendis, 1529）でも繰り返されていく。かかる点をとらえてウィトカウアーは、プルタルコスの思想はルネサンス期に復活したと考えているようだが、プルタルコス＝エラスムスの教育思想は、厳密に言えば、植物に水をやるという比喩に含意されている思想とは一線を画している。そこで強調されているのは、自然の成長に手を加えて矯正するという考えである。これは「添え木の世話」のたとえに最も良く表現されている。プルタルコスは言う。「美而善(カロカガテイア）の泉と根は、正式な教育を受けるところにある。丁度農夫が苗に添木(ママ)をするように、ちゃんとした教師ならば心を入れて子どもに原則と勧告を与え、子どもの性格が真っ直ぐに伸びるようにする」と[40]。

エラスムスも「老いたオウムは鞭を軽んずる」という格言を引き合いに出して、なにゆえに人間の子どもだけが何の配慮もなされないのかと問い、良い農民を例

にこう説明する。彼らだって無駄に時を過ごしているわけではない。若木が野生の本性をあらわして堅くなる前の、まだ柔らかいうちに「接ぎ木」（ラテン語はinsitio）を行って、曲がったままで育たないように注視している。仮に曲がってしまったなら、すぐにその箇所を「矯正する」（recto）。自然の成長に委ねていたのでは、動物や植物も農民の要求を満足させることはできない。時宜を得た働きかけこそ重要で、これは人間の場合も同じである。「適切で入念な教育が、すべての徳の源泉である」[41]。

「接ぎ木」という言葉が使用されているが、エラスムスが言わんとしている内容は、プルタルコスが「添木」で表現していたものと同じである。否むしろ、キリスト教の原罪説的子ども観を前提としたエラスムスにあっては[42]、矯正の考えはより前面に打ち出されていたと言っても過言ではない。教師を「形成者」（formator）として規定する彼の立場は（英語訳では単にteacherとしてしか訳されていないが）、その最たるものであった。「形成」とは、どのような姿形にしたいかをあらかじめイメージしておいて、生まれた瞬間から、子どもが本来的にもっている「気紛れな」傾向性を抑制し、形を整えていくことを意味している。ちなみに、プルタルコスやエラスムスにあっては、イメージされたその最終形態はプラトンの「哲人」であった。

「形成」という言葉はエラスムスの教育論では繰り返し使用されており、まさにキーコンセプトとなっているが、それは時に「訓練」や「馴致」（英訳ではtame）と同じ意味内容を含んでくる。このことが明瞭に表れてくるのは、何の訓練も受けなかった犬は食いしん坊になって皿にすぐ飛びつき、良く仕付けられた犬は獣を嗅ぎつけて猟ができるようになったという、スパルタの王リュクルゴスの二匹の犬の話を持ち出してきた時である。この話をプルタルコスは同一の親から生まれた二匹の子犬を前提に紹介していたが、面白いことに、エラスムスはこれを「生まれの良い純血種の犬」と「雑種犬」に変更して、きちんと訓練すれば雑種犬でもウサギを追う立派な猟犬となる、というストーリーに作りかえている[43]。要するに、教育や訓練の度合いをいっそう強めて、いわゆる「氏より育ち」を論証する事例として使用しているのだ。なお、エラスムスによって改作されたこのリュクルゴスの犬の話を、オットー・ウェニウスは1607年の『ホラティウスのエンブ

レム集』第25番――「教育と習慣の像」(Educationis et consuetudinis typus)――のエンブレムに採用し、教育の重要性を説くモチーフとして使用している(図14)[44]。

動物を使って教訓を説いたり風刺したりするのはエラスムスの最も得意とするところで、リュクルゴスの犬の話も、教育が「形成」ないし「馴致」であるとする考えを例証するために持ち出されてきたものであったが、後世への影響という点から見ると、さらに重要であったのは、わが子を舐めて形を作る母熊の話であった。生まれたときには醜い塊であった子熊を、母熊は辛抱強く舌で舐めて熊へと作り上げていくという、古代ギリシアの故事に由来するこの話の教育学的重要性は、いくら強調してもしすぎることはない。なぜなら、教育のあり方次第で人間は動物にもなれば神に似た存在にもなるという、エラスムスの教育論の有名なフレーズが生み出されてくるのは、まさにこの文脈においてであったし[45]、また、この母熊のモチーフは、死んだ子猿をいつまでも抱きしめる母猿――母親の過保護と甘やかしすぎが子どもを駄目にすることを戒める寓意――と並んで、16・17世紀のエンブレム・ブックでは繰り返し使用され、教育イメージの形成に一役買っていったからである[46]。

一二の例を挙げれば、たとえば、ラ・ペリエール(Guillaume de La Perrière, c. 1503-c. 1565)は、1544年版の『よき術策の劇場』(初版は1539年)第98番で母熊のエンブレムを使用して、「すべての良き知識はそれを探求することによって見いだされる」ことを主張し(図15)[47]、またショーンホヴィウス(Florentius Schoonhovius, 1594-1648)も、1618年の『エンブレム集』第72番――「心の世話はとくに持続されなければならない」(Cura animi imprimis gerenda)――では、子を舐める母熊の背景に教場を出現させることで教育との結びつきを強めていた(図16)[48]。なお、16・17世紀に教育や学習のエンブレムとして役立っていた母熊と子熊のイメージは、やがて改善のための躾=規律(discipline)の必要性の訴えに援用され、19世紀に入ると完全に体罰イメージに転換されていく。ドゥランティーニは、こうしたイメージの変換に17世紀のオランダ画家たちが大きな影響を与えたことを指摘している[49]。

以上の分析から明らかになってきたことは、プルタルコスやエラスムスには植物に水を注いで成長を促すという思想は基本的に欠けていたという点である。彼

らがラテン語の「教育」(educatio) というタームで思い描いていたのは、「矯正」、「形成」、「馴致」といった概念で表象されるものであった。では、植物に水を注いで成長を促すというイメージで教育を考え始めたのは一体誰だったのだろうか。OED で近代語「教育」の初出として挙げられたサー・トーマス・エリオット (Sir Thomas Elyot, 1490 ? - 1546) が、その人ではなかったろうか。1531年の『為政者論』第 1 巻第 4 章で彼はこう主張する。

「私は、賢明で熟練した庭師のやり方を用いようと思う。彼は自分の庭に、彼にとっても彼の所に通う他のすべての人々にとっても心がくつろぎ、かつ楽しみとなる立派で貴重なハーブをもとうとする場合、まず最初に、庭を探索して最も耕作しやすい肥沃な土地を見つけ、そこにハーブの種を植え、成長させ、肥料を与えていくであろう。そして最も入念な方法で、種子が成長し、実を結ぶのが邪魔されないように世話をしていくであろう。またしっかりと育つことができるように、ハーブの姿形がいったん現れ始めたら、すぐに水差しで根元に甘味な滴りを度々かけてやり、茎が伸びてきたら、折れないようにあるもので下支えをし、また雑草を抜いて常にきれいにしておくであろう。これと類似の順序を、私は、母親の子宮にあるときから公共の福祉の統治者であるように、あるいは、それにふさわしい人物となるようにできている、貴族の子どもたちの洗練された才知を形成する際にも守ろうと思う。」[50]

庭師の仕事とのアナロジーで子どもの教育を考えた思想家の姿がここには見られるが、上述の引用が「ジェントルマン子弟の教育、つまり、育て上げる形式について」(The education or Form of bringing up of the child of a gentleman...) と題された章の中で語られたものであることを考えるならば——彼はまた同書第 1 巻第 2 章の章題でも "the best form of education or bringing up of noble children" という表現を使用している——、近代語「教育」が初出の際に含意していた意味内容も自ずと理解されてこよう。ポイントは、言うまでもなく、ラテン語〈educatio〉の英訳ならば〈education〉の一語で済んだものを、エリオットはなぜわざわざ〈education or bringing up〉と表記したのかにある。これが、自分が

考えている教育の内実がプルタルコスやエラスムスが訴えている矯正としての教育とは異なることを示すために、エリオットが意図的に用いた表現であったと考えるのは、筆者の考えすぎであろうか。

だが一体、エリオットはこのアイデアをどこから入手したのだろうか。『為政者論』に直接手がかりとなるようなものは見いだされない。しかし彼がプルタルコスの教育論からヒントを得たことを示唆してくれる資料が残されている。The Education or bringinge vp of children というタイトルをもつ、エリオット自身の手によるプルタルコスの書の翻訳作品がそれだ（図17）[51]。50頁にも満たない「この小著」を、エリオットは二人の男の子をもつ妹 Margery Puttenham の子育てを支援するために出版した。学術書として企図されたものではないため、もちろん忠実な翻訳ではない。エリオットは大胆な意訳を試み、ときに削除・加筆を行っている。注目すべきは、プルタルコスやエラスムスが添え木の世話のたとえで語っていた個所を以下のように訳し、妹にアドバイスを送っていた点である。

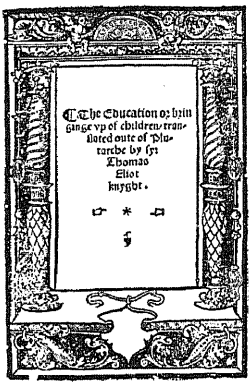
> 「たしかに、立派な品性と正直さの泉と根は、良い教えにあります。というのも、良き農夫が、低木の茂みを摘み取ったり、苗木を垣根で囲ったりするように（これは苗木が真っ直ぐに伸びるようにするためですが、同時に、牛に傷つけられたり、樹皮が剥がされたりしないようにするためでもあります）、完全な良き教師も、子どもたちに適正で立派な忠告や教訓を植え込んで、有徳な性格をもった若者が真っ直ぐに成長し、危険で獣のような悪徳から離れているようにすべきです。」[52]

エリオットは『為政者論』執筆に先だってプルタルコスの書を「注意深く読んだ」、と言われている[53]。庭師の方法を教育に適用しようという先述の『為政者論』の一節も、上記引用と同一の文脈にあったと考えて良いであろう。そうであるならば、苗木（＝子ども）の自然成長を前提に、それを阻害する要因を除去したり、垣根で囲って悪徳から保護するというエリオットの考えは、人間の教育を植物の栽培にたとえたルソーの思想にきわめて近い関係にあることになる[54]。〈bringing up〉として教育を理解しようとするエリオットのこだわりは、翻訳書の

図14

図15

図16



¶ The Education or bryn
ginge vp of children: tran-
slated oute of Plu-
tarche by syr
Thomas
Eliot
knyght.

図17

図14　ウェニウス『ホラティウスのエンブレム集』、1607年、第25番のエンブレム
図15　ラ・ペリエール『よき術策の劇場』、1544年、第98番のエンブレム
図16　ショーンホヴィウス『エンブレム集』、1618年、第72番のエンブレム
図17　エリオット訳・プルターク『子どもの教育』の表題、1533年頃

至る所に見いだされる。たとえば、そのタイトルに本来不要である〈bringing up〉の語をわざわざ挿入したこと、本文での〈education〉の単独使用例が3回（3）であるのに対して、〈bringing up〉が8回（1）と頻度が高いこと（カッコ内の数字は『為政者論』第1巻での使用回数を示す）、さらには訳書の末尾でプルタルコスの教育論を「まさしく本物の黄金の書」と記していたことなど。なお、エリオットのプルタルコス個人への思い入れも相当なもので、彼はプルタルコスを“the noble philosopher”（*Governour*, p. 28）、あるいは“the excellent philosopher”（翻訳書の序）と尊敬の念を込めて呼び、他の哲学者たちと区別した。これはプルタルコスがプラトンを“the divine philosopher”と呼んだのに匹敵する。

エリオットは14歳以上の子どもの教育にも〈bringing up〉という言葉を使用しているので、その語が幼少の子どもの躾や養育のみを表したものではなかったことははっきりとしている。だが、彼が提起した〈education〉=〈bringing up〉の考えは定着しなかったようだ。プルタルコスの教育論を敷衍して出版されたエドワード・グラント（Edward Grant）の作品（1571年）や、有名なパブリック・スクールの校長リチャード・マルカスター（Richard Mulcaster）の『提言』（1581年）は、ともにタイトルに〈training up〉という語を用いて〈education〉の代わりとしている[55]。

以上、プルタルコスに依拠しながら独自の思想を発展させていった二人のルネサンス・ヒューマニストの教育論を見てきた。二類型のモデルと教育観が確認される。農業モデルに基づいた、添え木の世話に象徴されるエラスムス的な教育観と、園芸モデルに基づいた、垣根の世話に象徴されるエリオット的な教育観が、それである。この二つの教育観はキリスト教的変容を受けながら引き継がれ、17世紀前半、第一の類型はリーパの「教育」図像に、第二の類型はリーパの「文法」図像に表現されていったように思われる。ちなみに、1625年のイタリア語版および1644年のフランス語版の「教育」図像は、テクストで規定した「努めて手を加えて（若者が）真っ直ぐに伸びるようにする」という教育の任務を、添え木（ないし杭）に縛り付けられた若木を、教育の擬人像がしっかりと手で支えている様子で表現していた（図9を参照）。

最後に、リーパの「教育」や「文法」の図像が出現したのとほぼ同時期に、第

三の類型とも言うべき新しい思想が誕生していたことについても一言述べておこう。これは、造園モデルに基づいた、接ぎ木の世話に象徴される思想で、コメニウス（J. A. Comenius, 1592-1670）の『大教授学』（1638年ラテン語訳、1657年出版）に特徴的に見いだされる[56]。コメニウスと言えば、人はすぐに印刷術のたとえを想い起こすかもしれないが、この比喩や「教刷術」という言葉は学校の改革に関して主に用いられたものであって、教育の原理論に関してではない。祖国の独立戦争に敗北したモラビア同胞教団の牧師コメニウスが、教育を論ずる際にもっぱら使用していたのは、造園技術の比喩であった。たとえば彼は次のように述べて、教育による人類救済の道を説く。

「破滅した人類の救済策を立てなければならないとするならば、それはなによりもまず青少年の・注意深い・用意周到な教育を通じてでなくてはならない、ということであります。それはちょうど、庭園を新しく造り直したい人が、そこに新しい苗木を植え、若木がよろこんで育って行くように心を配って面倒をみなければならないのと同じことです。申すまでもなく、古い木を移植してきて、これに肥料をやるのは造園技術の本旨ではないのです。」（献呈状，19）

聖書で語られている、人間が神にとっての「悦びの庭」、教会や国家が「神の楽園、神の庭園、神のぶどう園」であるようにすること、言い換えれば、地上の「迷宮」を緑に茂る「楽園」に変えることが、コメニウスの究極のヴィジョンであった。これを実現していく教育の方法も、またしたがって同じものでなければならなかった。彼はこう言う。

「青少年の教育にあたる人々に課せられた任務は、知識の種子をじょうずに青少年の魂の中に播き、神のこの若木に心して水をやり、やがてこの木の梢に美事な成果と成長とが現われるようにする以外にはないのであります。」（第16章，2）

ここで述べられている一連の行為は、肥沃な土地に種を植え、水や肥料を与えて

成長を促すという、エリオット的な植物栽培の技術ではない。それよりもより高度でより人為的な技術である「接ぎ木」の世話が求められているのである。「教育されなくては、人間は人間となることはできない」（第６章，１）という命題が成り立ってくるのも、これを前提としている。彼は言う。

「人間は、確かに放っておいても人の姿になることはなりますが、しかし予め知恵、徳行および敬神の心の若枝を接ぎ木しておかなくては、理性をそなえ・知恵を持ち・徳に溢れる・敬虔な動物に育つことはできないのです。」（第７章，１）

要するにコメニウスは、人間として生まれてきた子ども（＝台木）に、現世における人間の使命・課題と考えられた学識、徳行、敬神を接ぎ枝として接ぐことで、まったく新しい種類の人間に造り変えていこうとするのである。この比喩を彼は記憶に頼って多くを教え込む教師たちを批判する際にも同様に用いている。たとえば、「樹根をやわらかに切り開いて知識の接枝をさし込む方法を知らない教師も、同罪です。ですから、このような教師は、若枝を切る時に小刀の代りに棍棒や木槌を使う職人と同じく、生徒を枯らしてしまうのです。」（第16章，36）といった具合に。

むすび

ヨーロッパ16・17世紀は数多くの教育論が著された時代であった。同様に、古代の思想とキリスト教の思想が相互に入り交じって形成された教育イメージも、この時代、多数存在していた。リーパの「文法」の図像上および思想上の源泉を探った本稿は、そうした諸々のイメージの中心にあったのが、子どもを樹木や植物になぞらえて教育を思考する様式であり、しかもそこには、農業の比喩に基づいた添え木の世話、園芸の比喩に基づいた垣根の世話、造園の比喩に基づいた接ぎ木の世話、に象徴される三つの類型が存在していたことを明らかにした。今やわれわれは端的にこう言えるだろう。木や植物に水をやる思想を古代・中世・近代を通して一本の線で辿ることは困難であるし、また、ルソーの植物栽培モデル

を教育思想の一大転換とするような位置づけは見直す必要があろう、と。

なお、本稿では、プルタルコスと並んでルネサンス・ヒューマニストたちに大きな影響を与えたクインティリアヌスの教育論の思想系譜や、16世紀前半に現れた〈bringing up〉の考えが世紀後半に〈training up〉に取って代わられていく要因、また母熊のエンブレムが規律の概念や体罰イメージと結びついていく過程、さらには17世紀の教育的宇宙像が18世紀の市民社会や啓蒙思想の発展のなかでいかなる変容を遂げていったのかという問題については触れずじまいに終わった。これらの点に関しては、別に稿を改めて検討しなければならないだろう。

注

1）参照。安川哲夫「チェーザレ・リーパの「教育」図像について――教育のイメージ変化に関する一考察――」教育史学会紀要『日本の教育史学』第46集、2003年、181－199頁。

2）美術史家ドゥランティーニは、『17世紀オランダ絵画の中の子ども』（1983年）とくに第2章で、中世の文法図が、オスターデ（Adriaen van Ostade, 1610－1685）、ヘリト・ダウ（Gerard Dou, 1613－75）、それにヤン・ステーン（Jan Steen, 1626－79）らに代表されるオランダの民衆学校絵画に受容され変容していく過程を見事に論証している。参照。Mary Frances Durantini, *The child in seventeenth-century Dutch painting*, UMI Research Press, 1983. Revision of thesis (Ph.D.), University of California, Berkeley, 1979.

3）参照。Ayers Bagley, "Grammar as Teacher: A Study in the Iconics of Education," *Studies in Medieval and Renaissance Teaching*, 1 (1), 1990, 17－48. 50点余りの文法図を俎上に載せたこの論文は、類型化を通して文法イメージの多様性に読者の目を向けさせることには成功しているけれども、惜しむらくは、歴史的な分析が完全に欠落している。なお、バグリーはミネソタ大学の教育史の教授で、同大学の「教育図像プロジェクト Education Iconics Project」のディレクターでもある。教育関連図像に焦点を合わせた彼の研究論文の多くはweb上でも公開されているので、参照されたし。see The Virtual Museum of Education Iconics. http://education.umn.edu/EdPA/iconics/default.htm

4）この論文は最初ヴァールブルグ研究所の紀要に発表され（"'Grammatica': from Martianus Capella to Hogarth," *Journal of the Warburg Institute*, Vol. 2, No. 1, 1938)、後にRudolf Wittkower, *Allegory and Migration of Symbols*, London, 1977. に収められた（『アレゴリーとシンボル：図像の東西交渉史』大野芳材・西野嘉章訳、平凡社、1991年）。なお、ホガース（William Hogarth, 1697－1764）の2点の版画は同上訳書の図219と図220に掲載されているので、参照されたし。

5）このことは、カペラから14世紀までの自由学芸の図像を収集・分析して、中世美術史研究では通説となっていたエミール・マールの見解を批判したミッシェル・エヴァンスの学位論文からも見て取れる。see Michael W. Evans, "Personifications of the Artes from Martianus Capella up to the end of the Fourteenth Century," Ph. D. thesis (unpublished) University of London, 1970. なお、樹系図で7自由学芸を描いたものも存在するが、根は文法ではない。また「エッサイの樹」に見立てて諸学問を描いた寓意図がグレゴリウス・ライシュの『哲学宝典』（1503）に収められているけれども、そこで樹根として位置しているのは「哲学」である。安川哲夫「グレゴリウス・ライシュ『哲学宝典』の「文法」図像について――教育史的・図像学的アプローチ――」（『金沢大学教育学部紀要』第54号、2005、27-54頁）の図3参照。

6）ルソー『エミール』今野一雄訳、岩波文庫、上、23-24頁。

7）たとえば、森重雄『モダンのアンスタンス』ハーベスト社、1993年；藤田英典・田中孝彦・寺崎弘昭『教育学入門』岩波書店、1997年を参照。

8）村井実『教育学入門』講談社学術文庫、1976年、下、187-188頁。

9）ex. Cesare Ripa, *Iconologia*, Padova, 1611 (British Librery, shelf mark, 637. g. 26), 210. The Renaissance and the gods; no. 21, Garland Pub., 1976.「文法」の二項目はパドヴァで出版された1625年版でも確認できるが(C. Ripa, *Della Novissima Iconologia*, Padova, 1625)、1618年版は一つの項目、それも乳房からあふれ出る乳で文法を寓意したテクストしか掲載していない（C. Ripa, *Iconologia*, edizione pratica a cura di Piero Buscaroli, con prefazione di Mario Praz, Torino: Fogola, 1988, v. 1, 193)。

10）Jean Bavdoin, ed., *Iconologie: ou, explication nouvelle de plusieurs images, emblemes, et autres figures hyerogliphiques* ..., 2 tomes, Paris, 1644 (British Librery, shelf mark, 88. I. 4), I, "Grammaire LXXII", 84. ボードワンはリーパから174項目を選択して、1636年円形模様のメダルカットで各銅版に6個をイラストした私家版を出した。リーパの最も早い翻訳で、最初のフランス語版であったが、これが流布するようになったのは、7年後の1644年にパリで2巻本として出版されてからであった。アルファベット順に構成された1636年版はその第1巻を構成している。本書は1677年、1681年、1698年にも再版されていく。A Garland Seriesに復刻版がある。The Renaissance and the Gods, no. 29, Garland Pub. 1976. なお、翻訳者ボードワンは、ギリシア・ローマの古典やイギリスのF. ベーコンやP. シドニー、イタリアのT. タッソなどの作品の翻訳書を多数出版した翻訳家で、アカデミーの会員。

11）ウィトカウアー、前掲訳書、図223を参照。

12）ラ・イールの絵画「文法」（ロンドン・ナショナル・ギャラリー蔵）は、ルイ13世紀の相談役の一人ジェデオン・タルマンのパリの邸宅の部屋を装飾するために描かれた自由学芸シリーズの一点で、図解が*The National Gallery*, pp.46-47. にある。プリムラとア

ネモネが植えられた素焼きの鉢が二つ描かれている点がこの絵画の大きな特徴で、これは、ウィトコウアーの説明によれば、古代の文法学者プリスキアヌスの文法の定義——「4つの異なる音声がある。分節化された声、されない声、文字になった声、ならない声」(Vocis differentiae sunt quattutor: articulata, inarticulata, litterata, illiterata.)——の二つの肯定的な部分を図解した結果であった。

13) カペラについては、*Martianus Capella and the Seven Liberal Arts*, Columbia University Press, N.Y. 2 vols, 1991 and 1997. と廣川洋一「〈自由三学科〉の成立——マルティアヌス・カペラにおける——」(『新岩波講座　哲学　14』岩波書店、1985年、320-347頁)を参照されたし。

14) マンテーニャのタロッキについては、Adam McLean, An Hermetic Origin of the Tarot Cards? A Consideration of the Tarocchi of Mantegna, First published in the *Hermetic Journal* 1983. http://www.levity.com/alchemy/mantegna.html [2006.11.28.] を参照。著者は、マンテーニャのタロッキを、ヘルメス主義の流れを汲んだ「エンブレム・ブック」と見ることを提起している。ウィトカウアー、前掲訳書、図222にも類似の文法のタロッキが掲載されている。

15) J.G. Hertel (ed.), *Iconologia*, Ausburg, 1758 (British Librery, shelf mark, 87. k. 14), CXCI. cf. Cesare Ripa: *Baroque and Rococo Pictorial Imagery*: The 1758-60 Hertel edition of Ripa's *Iconologia* with 200 engraved illustrations, edited by Edward A. Maser, Dover Publication, New York, 1971, 191. ヘルテル版は、文字による説明を退け、銅版画で一頁全体に大きく描かれた寓意図像で語らせる方法を採用した点で、きわめてユニークな作品となっている。解説付きでヘルテル版を復刻した1971年のドーヴァー版と、それに依拠しながら全図版をさらに詳細に説明した水之江有一『図像学事典－リーパとその系譜－』(岩崎美術社、1991年)を参照。ただし、鞭の解釈については意見が分かれるかもしれない。ドーヴァー版や水之江は、鞭打たれて苦しみながら文法を勉強すると、著述や雄弁によって報酬を得ることを意味していると解釈しているが、18世紀後半の『図像学』では体罰の役割は相当低くなっている。またブダール版やリチャードソン版では鞭に関する記述はテクストから排除されている。こうした点を考えると、ヘルテル版では鞭は投げ捨てられている、と解釈する余地も生じてこよう。

16) J.B. Boudard (d. 1778), ed., *Iconologie*, Vienna, 1766, II, 53. A Garland Series に復刻版がある。The Renaissance and the Gods, no. 43, 1976.

17) G. Richardson (1736?-1817?), ed., *Iconology; or, A Collection of emblematical figures, moral and instructive*; 2 vols, London, 1779 (British Librery, shelf mark, 92. I. 4), XXXIII, Fig. 128. イラストは水彩画である。A Garland Series に復刻版がある。cf. *The Philosophy of Images*; 20, 2 vols, 1979.

18) ただし、1644年のオランダ語版（Dirck Pitersz Pers (ed.), *Iconologia*, Amstelredam, 1644.）と1709年の最初の英語版（[P. Tempest (ed.),] *Iconologia: or, Morall Emblems*, London, 1709.）には項目「文法」は含まれていない。

19) 一例としてリチャードソン版を紹介しておこう。「文法は自由学芸の最初にランクされる。これは正しく話す学問で、言葉が相互にどのように関係しているのかを教える。女性の背後にある台座に「言葉は正しく綴り、しかるべく明瞭に区切りて発せられるべし」という銘が刻まれている。彼女は右手にやすりを持ち、左手に水差しをもつ。注がれた水が植物を育てるように、文法も若者の精神を他の学問の達成に向けて準備し整える。やすりは、文法が知能を喚起し鋭くすることを示している。」Richardson ed., *Iconology*, I, 69.

20) ウィトカウアー、前掲書、図221を参照。この図では、女性「文法」は、右手にメスなどが入った壺を手にし、左手で植物に水をやっている。壺はカペラの写本伝統に倣ったものであろう。

21) Jean Jacques Boissard, *Emblematum liber. Ipsa emblemata ab auctore delineata: a Theodoro de Bry sculpta*, 1593, emblem IX, "Vita Virtutis expers Morte peior"（「徳のない人生は死よりも悪い」）、19. Nachdr. d. Ausg. Frankfurt am Main, Olms, 1977, Emblematisches Cabinet; Bd. 12.

22) Theatrum Orbis Terrarum, 1635. Oxford, Merton College, Post Card.

23) see Evans, ibid., Chap. 8.

24) see Evans, Figs. 211-213, 217. アウグスティヌスの勝利の図像の大きな特徴は、徳を悪徳に勝利したものとして描き、徳と自由学芸との、また学芸と唱道者との結合を強調している点にある。

25) アラヌスの『アンティクラウディアヌス』（Anticlaudianus）の写本の数は100以上にのぼると言われる。邦訳が上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成 8 シャルトル学派』（秋山学＋大谷啓治訳、平凡社、2002年）にある。

26) アラヌス、前掲訳書、918頁。

27) Claude Paradin, *Devises heroïques*, 1551, Introduction by Alison Saunders (Aldershot: Scolar Press, 1989). Introduction, 1. 本書は1562年にラテン語訳され、ドイツ語版（1563年）や英語版（1591年）も刊行される。またパリでは17世紀に入っても1614年、1621年、1622年と版を重ねていく。

28) Joachim Camerarius, *Symbolorum ac emblematum*, 1590. cf. Arthur Henkel und Albrecht Schone, (hers.), *Emblemata: Handbuch zur Sinnbildkunst des XVI. und XVII. Jahrhunderts*, Stuttgart: J.B. Metzler, 1996, 205. カメラリウスは植物学者で医師。植物に水を注ぐメルクリウスの図は、動植物を中心に全400点のエンブレムを含んだ全４巻の第１巻に収められている。本書のラテン語版は1562年、英語版は1591年に出版され

ている。

29) Andre Masson, *L'Allegorie*, Que sais-je? no. 1576, 1974. レ・マソン『寓意の図像学』末松壽訳、文庫クセジュ、1977年、114頁。

30) Jean Seznec, "Myth in the Middle Ages and the Renaissance", in *Dictionary of the History of Ideas*, ed. by Philip P. Winner, 1968. ウィーナー編『西洋思想大事典3』(平凡社、1990年) 所収の「神話 (中世・ルネサンスにおける)」25頁を参照。

31) たとえば、ウィーンのイエズス会 (Dauphine) によって管理されたフランスのコレージュは、エンブレムに公的に注目した修辞学クラスを設けていたが、1649年のそのコースにはエンブレムに関する広範囲なセクションが含まれていた。see Bagley, "Some Pedagogical Uses of the Emblem in Sixteenth- and Seventeenth-Century England," *Emblematica*, VII, 1 (1993), 39-60.

32) 参照。マリオ・プラーツ『綺想主義研究:バロックのエンブレム類典』伊藤博明訳、ありな書房、1998年。また『綺想主義研究』の「訳注補遺」として出版された、同訳者による『エンブレム文献資料集』(ありな書房、1999年) も参照されたし。

33) 『敬虔な欲望』の著者ヘルマン・フーゴ (Hermann Hugo, 1558-1629) は、ブリュッセルのイエズス会コレージュの学事長で、彼は本書をイグナティウス・デ・ロヨラが記した心霊修行の3つの段階——浄化 purgation、照明 Illumination、一致 Union——に対応した3部で構成した。またアントウェルペンのイエズス会の修辞学学院で作成された匿名の『世界像』は聖イグナティウスに献じられており、口絵には、現世から天国へ高くのぼることを暗示する、地球の上に立ったロヨラが描かれている。

34) Otto Vaenius, *Amorum Emblemata*, 1608, Antwerpen, 40, p.78. see http://emblems.let.uu.nl/v1608toc.html [2006.11.28.] 本書に収録されている図版は124枚で、ボエル (Cornelius Boel) によって描かれた。なお、『愛のエンブレム集』においてヘラクレスとアモルが三つの様式で描き出されている点に着目したバグリーは、これらのエンブレムは、「(人々を) 道徳化し文明化する愛の力が、剛毅とガイダンスを求めている」ことを示している、と結論づけている。Ayers Bagley, Hercules in Emblem Books and Schools, in *The Telling Image: Explorations inthe Emblem*, eds., Ayers L. Bagley, Edward M. Griffin, Austin J. McLean, AMS Press, New York, 1996, 69-95. ちなみに、ヘラクレスとアモルが登場するエンブレムは、①第17番「愛が徳の根源」(Virtutis radix amor)、②第27番「徳に導かれて」(Virtute duce)、③第42番「愛が芸術を教える」(Amor addocet artes) である。植物に水をやるアモルと類似した図版が、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』(プリューファー編・荘司雅子訳、キリスト教保育連盟、1976年) 所収の「小さな園庭」に見られる。

35) Otto Vaenius, *Emblemata aliquot selectiora amatoria*, 1618, "Plant rigat magis crescunt" [25]. http://emblems.let.uu.nl/va1618toc.html [2006.11.28.]

36) プラーツ、前掲訳書、186頁。

37) Otto Vaenius, *Amoris Divini Emblemata*, 1615. http://emblems.let.uu.nl/v1615front.html [2006.11.28.]

38) プルタルコス、河野與一選訳『プルターク『倫理論集』の話』岩波書店、1964年、351頁。*Plutarch's Moralia, 1* with an English translation by Frank Cole Babbitt, Loeb Classical Library (Harvard U. Press), 1969. pp. 7 and 9. なお、E.D. ベリーは、農業の例をあげて説明するプルタルコスの思想が、ラテン世界に流入して新しいメタファー "cultura animi" を生んだこと、またプルタルコスの教育論とクインティリアヌスの『弁論家の教育』第1巻と第2巻、およびタキトゥスの『対話』との間に多くの類似点があり、これら三つの作品は共通の教育的源泉から発していることを指摘している。Edmund G. Berry, "The De Liberis Educandis of Pseudo-Plutarch," *Harvard Studies in Classical Philology*, Vol. 63, 1958, 387-399.

39) プルタルコスは言う。「豊かな土地も放っておけば荒れるが、痩せた原っぱも耕せば立派な収穫ができる」(前掲訳書、352頁; *Moralia, 1*, p. 11)。「植物だって適度の水分で育つのが、むやみに水をやると息が詰まるように、心も分相応の勉強で伸びるが、度を過ごすと溺れてしまう」と(同、360頁; *Moralia, 1*, p. 43)。ウィトカウアーは後者を引用して、プルタルコスは植物の成長と水をやることを若者の教育にたとえた、と主張する。

40) プルタルコス、河野與一選訳、354頁。*Moralia*, 1, p. 19.

41) エラスムスの教育論については、A Declamation on the Subject of Early Liberal Education for Children, translated and annotated by Beert C. Verstraete, in the *Collected works of Erasmus*, vol. 26, Literary and educational writings: 4. University of Toront Press, 1985, 295-346. を使用した。併せて、Desiderii Erasmi Roterdami, *Opera Omnia*, Tomus I, Hildesheim: Georg Olms, 1961, 489-516. 所収の原典と邦訳『エラスムス教育論』(中城進訳、二瓶社、1994年)も参照した。上述の引用は、*Collected works of Erasmus*, vol. 26, pp. 300-301; 訳書、15-17頁。

42) エラスムスは原罪論に幼少の子どもたちが悪に走りやすい根拠を求め、このキリスト教の原理を知らなかったために、古代の哲学者たちは子どもたちの悪の原因を理解できなかった、と主張する。*Collected works of Erasmus*, vol. 26, 321; 訳書、59頁。

43) *Collected works of Erasmus*, vol. 26, p. 301; 訳書、17頁。

44) Otto Vaenius, *Quinti Horatii Flacci Emblemata*, 1607, "Educationis et consuetudinis typus" [25] http://emblems.let.uu.nl/va1612toc.html [2006.11.28.]

45) エラスムスは言う。「自然が与えた子どもは、形のない塊以外の何ものでもない。しかし素材はまだ柔らかく、何らかの形を身に付けることができるので、それが可能な限り最良の性格を取るように形成(mould)しなければならない。それを怠れば動物を育て

ることになるが、心を込めて行えば、大胆な言葉を使っても良いのなら、神にも似た被造物を形作る(fashion)ことになるだろう。」*Collected works of Erasmus*, vol. 26, p.305; 訳書、25頁。

46) 母熊と母猿のメタファーと教育との関係については、以下の書が詳しい。see A. Bagley, "Childhood Education in Emblem Books of the Sixteenth and Seventeenth Centuries," *Emblematica*, VII, 2 (1993): 321-344; M.F. Durantini, *The child in seventeenth-century Dutch painting*, 1983.

47) Guillaume de La Perrière, *Le theatre des bons engins*, 1544, emblem 98. Reprint with Introduction by Alison Saunders, Scolar Press, 1993. この書はフランス語で構成された最初のエンブレム作品で、そこに掲載された母熊（と母猿）のエンブレムは以後のモデルを形作った。ちなみに、テッツィアーノはそれを「技芸は自然に勝る」(Natura potentior Ars) というモットーを伴った自身のインプレーサとして採用し、ウェニウスも『愛のエンブレム集』(1608) の第29番――「時は徐々に粗野な愛を磨く」(Perpolit incultum paullatim tempus amorem)――で、母熊を側で見守るキューピットを添えてこのモチーフを使用している。

48) Florentius Schoonhovius, *Emblemata*, Gouda, 1618, emblem 72. Reprint, Georg Olms, Hildesheim; N.Y., 1975.

49) Duranitini, *ibid.*, p. 122.

50) Sir Thomas Elyot, *The Boke Named the Governour*, 1531, Everyman's Library, p. 15.

51) *The Education or bringinge vp of children*/translated oute of Plutarche by Syr Thomas Eliot, Knyght. in *The English experience*, its record in early printed books published in facsimile; no. 184. Da Capo Press, 1969. 頁数および出版年は記されていない。British Museum Catalogue は出版年を1535年と推定しているが、近年の研究はそれよりも早い1533年頃としている。この書は当時英訳された数多くの翻訳書の最初のものであった。*Four Tudor Books on Education*, with an introduction by Robert D. Pepper, Facsimiles & Reprints, 1966. Introduction, x. なお、エリオットの植物類推に基づいた教育の考えは、彼の医学知識にまで遡ることができるかもしれない。というのも、彼は、ヒッポクラテス (Hippokrates of Kos, c. 460 BC-c. 370 BC) やガレノス (Galenus of Pergamum, 129-200 AD) らの古代医学書から医学を学んだが、リーパの「教育」のテクストが正しければ、ガレノスの『分裂症の治療について』の中には「子どもたちの教育は植物の栽培と同じである」という一文が含まれていたからである。

52) see Chap. IV. 上記の訳出個所を原文で示せば次の通りである。"... certaynly the fountayne and roote of worshyppe and honestye, is good doctrine. For lykewyse as good husbandes do pyche busshes and hedges aboute yonge settes (as well to thentence they shulde growe streyght as to kepe them from bytynge and barkynge of

catall) so good perfecte maysters plant in children conuenable and good aduertisementes, and precceptes, wherby the yonge spryng of vertuous maners shall growe streyghte, and be out of daungerous and beastly vice."

53) *Four Tudor Books on Education*, Robert D. Pepper, Introduction, ix.

54) もっとも私は、エリオットがルソーの思想を先取りしていたなどと主張するつもりはない。政治的社会的エリートである貴族・ジェントルマンを念頭において、彼らの子弟を社会的悪徳からまもる保護空間である家庭の中に囲い込んで意識的に教育しようとするエリオットと、既存の支配的な文化価値体系を否定し、文明批判の観点から自然をアンチテーゼとして提起するために植物栽培モデルを使ったルソーとは、自ずとその基本的立場は大きく異なっている。

55) cf. Edward Grant, *A President for Parents, Teaching the vertuous training up of Children and holesome information of yongmen* [sic], 1571. and Richard Mulcaster, *Positions Concerning the Training Up of Children*, 1581.

56) 以下のコメニウス『大教授学』からの引用は、世界教育学選集（明治図書）シリーズに収められている鈴木秀勇訳からのものである。引用箇所は本文に記したが、訳書の頁数は省略した。

On the Allegorical Figure of "Grammar" in Cesare Ripa's *Iconologia*: A Historical Study of Educational Ideas and Images

Tetsuo YASUKAWA

The illustration of "Grammar" in Ripa's *Iconologia*, which firstly appeared with its allegorical design of watering the plants in 1644 French edition, was a very unique in the history of educational images. It recalls us to two things: one is that Sir Thomas Elyot defined the first modern term 'education' as 'bringing up' in *The Boke named Gouvouner* (1531), and another is that Rousseau explained the education of a man by analogy with the cultivation of plants in *Emile* (1762). The purpose of this paper is to clarify clear the pictorial and ideological sources of the image of Ripa's "Grammar" and appreciate its educational cosmology.

Most of the Italian's editions had two articles on Grammar without illustrations. In 1625 edition, for example, one of them (we call it A-text) was described by a banderole with motto, a rod and the figure of a woman spraying forth milk from her breasts, and the other (B-text) by a file and the figure of a woman pouring water upon a tender plant. Jean Baudoin, the 1644 French translator, illustrated the grammar on the B-text of 1625 Italian edition, but there were some gaps between text and illustration. Its illustration had not a file which was indispensable to Ripa's grammar. Therefore, each editor in 1760 German, 1766 French and 1779 English editions added it in his illustrations. Text also included the two different personifications of grammar. Although the pictorial representation of grammar by a metaphor of breasts was very influential in the 16th century, instead of using it, Baudoin preferred the allegorical figure of a woman watering the plant. Why did he so?

One reason is the first appearance of article "Education" in the 1625 Italian edition. Baudoin, who translated Ripa's *Iconologia* on this edition written in alphabetical order, must have thought that an idea in B-text had been enough expressed in words and image of education with a rod and breasts full of milk.

Another reason is his judgement that the spirits of time in Counter-Reformation are better embodied in an allegory of watering the plant. Its design appeared in the 16th century emblem books, especially, in C. Paradin's *Devises heroïques* (1551), J. Camerarius' *Symbolorum ac emblematum* (1590), and Otto Venius' *Amorum Emblemata* (1608). These works emphasized the moral practice and the love of God that remove the impurities in the mind and make a man of virtue. It seems that Baudoin got a hint of design of grammar from their emblems.

Finally, I pursued the historical roots of ideas of Ripa's "Education" and "Grammar" and identified that they respectively represented the two Christianized types of educational ideas derived from Plutarch. Allegorical figure of "Education" illustrated the Erasmus' idea of placing stakes besides the young plants on agriculture model. It was characterized by the terms such as rectify, form, mold, train, and tame, and was seen, for instance, in the stories of mother bear licking her cub into shape and Lycurgus' comparison of the trained and the untrained dogs. On the other hand, "Grammar" embodied the Elyot's idea of natural upbringing on gardening model. This image of a child growing up within a protected zone that shelters him from social vices is why Elyot regarded 'education' in the same light as 'bringing up.'

There were various images of education in the half of 17th century Europe. Shortly after Ripa's "Education" and "Grammar," the new and third type of educational image and idea, using a metaphor of grafting a tree into another one on a landscape gardening model, appeared in Comenius' *Didactica Magna* (1657). It is necessary to understand a distinct difference in the metaphor and the changing image of education in order to have a clear grasp of the essence of modern educational thoughts.